

○明治45年(1912) 佐賀県鍋島(なべしま)村(現、佐賀市)に誕生。生後すぐ戸川家の養子となる。

幼い頃から大の動物好きでおもちゃやお菓子より犬や鳥をみせたほうが泣き止むくらいだった。身体が弱かったが子犬を飼って一緒に遊ぶうちに丈夫になってきた。

10歳で家族と共に上京。当時、東京市のごみ捨て場だった戸山が原(現、新宿区戸山町)で、動物の骨を集め調べることで動物好きは生態にまで興味をもつようになった。

○昭和7年(1932) 20歳 動物学者を志望し、高千穂中学を経て、旧制山形高校理科に入学。

分類学的な講義にはあきたらず自転車で蔵王連山を巡り、ニホンオオカミや日本犬を求めて山歩きと野生動物の観察に夢中になる。

○昭和12年(1937) 25歳 東京日日新聞社(現、毎日新聞社)社会部に入社。

海軍報道員として南方諸地域を広く歩く。のちの戦記もの、辺境ルポの土台となった。

終戦後、社会部副部長、毎日グラフ編集次長を歴任。サン写真新聞に出向。

○昭和29年(1954) 42歳 作家・長谷川伸の勉強会「新鷹会(しんようかい)」に参加。

当時の門下には山岡荘八、村上元三、山手樹一郎などそうそうたるメンバー。新鷹会の同人誌「大衆文芸」に山形で出会った最後の高安犬チンを題材に「高安犬物語(こうやすいぬものがたり)」を発表。

○昭和30年(1955) 43歳 「高安犬物語」で第32回直木賞を受賞。

恩師、長谷川伸の「世界には動物文学というジャンルがある・・・」先輩、井上靖の「誰もやっていない分野だからこそ、やりがいがある・・・」という助言を受け、新聞社を退社し、作家生活に入る。

受賞後第1作目の「飴色角(あめいろつの)と三本指」をはじめ、山形県を中心とする東北の動物を主人公に「牙王(きばおう)」、「山の動物たち」、「熊犬物語」、「吾妻の白猿神」など、多数刊行。

同時に北海道知床半島、下北半島、都井岬など、訪れる人のいない辺境の地や、奥羽山脈深く住み着き厳しい狩猟作法を守って生活する狩人マタギ、など自然の中で生きる人間と野生動物を何年もカメラとペンでルポして歩く。

後に「野生への旅」1~5巻刊行。

知床半島で、雪と氷に閉ざされた番屋でひと冬をたった一人で過ごす留守番さんと呼ばれる老人を主人公に書いた「オホーツク老人」(1959)は、森繁久弥

主演で映画化され（「地の果てに生きる者」）、撮影最終日に森繁が歌った自作の歌「さらば羅臼」は、「知床旅情」として加藤登紀子によって歌われ、広く歌い継がれている。

○昭和40年（1965）53歳 沖縄西表島にて野生のヤマネコを発見。

「野生への旅」5巻の取材で沖縄を訪れた際、「西表島には野生のヤマネコが居るらしい」と聞かされ、西表島へ渡り、調査を始める。地元の人々の協力もあり、苦心の末、野生のヤマネコの頭蓋骨と皮を手に入れ持ち帰る。日本哺乳動物学会で、新種のヤマネコと認定され、国立科学博物館の今泉吉典博士の分析によりマヤイルス属イリオモテヤマネコ。イリオモテヤマネコと命名される。

○昭和41年（1966）54歳 アフリカへ

この年、再度、西表島へ調査に出かける。捕獲されたオスメス1体ずつ、生きたヤマネコを手に入れ、国立博物館から委託され2年半（1966,3～1968,6）、自宅で飼育。観察する。

「・・・はじめてウガンダのエンテベ空港に降り立った時は飛行場の大地に座り込み、土をすくってほお擦りしたものだった・・・」（「サバンナの風」より）翌年もケニア、ウガンダ、タンザニアを訪れ、大自然の中で躍動する野生動物に魅了される。

○昭和43年（1968）56歳 「戸川幸夫 子どものための動物物語」で産経児童出版文化賞を受賞。インド北部、ラジャスタン州、ブンディー王国のマハラジャの招待で、初めて野生のトラを見る。

次の年からアフリカに加えてインドにも毎年のように訪れる。特に好きな野生動物を聞かれた時、オオカミとトラと言うほどにトラの孤高な美しさに魅了される。

この間「戸川幸夫動物文学全集」全十巻（冬樹社）「イリオモテヤマネコ」、「戸川幸夫動物文学」1～3（新潮社）、「すばらしき動物の世界」五巻（朝日ソノラマ）、「人食い鉄道」、「サバンナに生きる」等を発刊

○昭和52年（1977）65歳 「戸川幸夫動物文学全集」全十五巻（講談社）が完結

○昭和53年（1978）66歳 「戸川幸夫動物文学全集」にて芸術選奨文部大臣賞受賞

○昭和56年（1981）69歳 動物文学に尽くした功により紫綬褒章を受ける

「虎 この孤高なるもの」、「白色山塊」等、刊行

アフリカ、インド始め海外を旅するようになってからは、目は海外の野生動物保護活動にも向けられ、野生動物と環境保全をテーマに講演することが多くなる。

○昭和60年（1985）73歳 児童文化功労者に選ばれる

○昭和61年（1986）74歳 勲三等瑞宝章、受賞

「オーロラの下で」が、シベリアを舞台に日ソ合作映画化される
この間、「虎を求めて」刊行

○平成5年（1993）81歳 脳梗塞で倒れる。この後、10年間自宅療養を続ける。

倒れる年まで、ライオンやトラを求めて、アフリカ、インドへ合わせて30～40回歴訪する。

動物を擬人化するのではなく、生態、習性などを忠実に描いた。芯になった正確な調査と観察は、戸山が原で動物の骨を拾っていた少年時代、旧山形高校時代、新聞記者時代を通して培われたものだった。

○平成16年（2004）92歳 死去

「開発され、山奥へと逃げまどいながら不必要に殺されていく動物たち。彼らにも生きる権利はあるはず」の想いは、すべての作品に投影されている。